山梨新報「直言」原稿

平成十六年〇二月十三日

「幼児化した高校生に過酷な未来」

山梨大学　副学長　伊藤　洋

多少なりとも地球環境の保全に役立つかと思って、不便だが通勤にはできるだけ電車を使うように心がけている。「群衆の中の孤独」で、読書に専念できるというのも電車利用の効能である。しかし、それが近頃怪しくなってきた。「群衆の喧騒」に掻き消されて、「孤独」が保たれなくなってきたのだ。

ここに、「群衆」とは専ら高校生を指す。電車内における高校生の乗車態度の悪さは昨日今日に始まったことではないが、近年は特にひどい。車中で飲んだり食ったりは言うに及ばず、容器など車中に置きっぱなしで下車する。通路といわず、あたり構わず「ジベタリアン」。四人がけの座席に大きな鞄を置いて、たとえ高齢者や障害者が側に立っていようとも知らぬ顔をロックアウトして平気。仲間同士で傍若無人に大声でしゃべる。メールが主流になったので数は減ったが、聞くにたえない幼稚な会話を携帯電話で延々とやる。七つ道具を総動員して、お化粧や毛づくろいに専念する。これはまぎれも無く退行であり、幼児化である。

こう書いたからとて、筆者はこの少年少女たちをバッシングしようというのではない。そうではなくて、彼らがここまで幼児化するには余程困難な現実があるからにちがいないと思っている。

ところで、少年少女とは、単に年齢が若い人間というのではない。生涯のうちで、「少年少女時代」という特別に用意された「時期」があるということを「発見」したのはジャン＝ジャック＝ルソーだ。それまで、少年少女とは文字どおり小さな大人のことと解されていた。その社会的弱さのために彼らの権利は常に侵されていたのである。

ルソーによれば、少年少女時代にこそ、大人になって必要となる知恵や教養を、保護された特別な環境の中で訓育しなくてはいけない。彼は名作『エミール』でそう主張した。

近代社会は、ルソーの教えに従って、少年少女

の幸せのために学校を作り、教員を配置し、公教育システムを完備した。しかし、それが今や多くの少年少女達に苦痛の場と化した。形而下的規則ばかりで、「なぜ学ぶのか」が、教えられないのである。また、最近まで信じられていた「良い学校に入って、良い会社に就職すれば幸せになる」という確信は、リストラの現実を前にぐらついている。それなのに、彼らは親からも、教師からも、世間からも、「学力が足りない。勉強せよ。さもないと立派な大人になれないぞ」と常に叱咤され続けているのだ。

加えて、困ったことに、今まで模範とされてきた種類の大人達が、思いもよらない破廉恥な事件を起す。政治家や官僚の汚職はすでに定番で珍しくも無いが、最近では教育界、法曹界、医学界など社会的に信頼と尊敬を集めていたセクターの住人までもが物議をかもす。あんな程度の大人になるためには、勉強しなくてはならないのならば、「いっそのこと大人にならない方を選ぼう」というのが、この退行した幼児性につながっているのではないか。

他方、深刻な不況の深化の中でこの国の労働市場における雇用の形態は、極めて殺伐とした変化を遂げようとしている。大手就職情報会社からたまたま送られてきた正社員時代のタイトルは『それに『冊子の終焉』。この五年間で企業の正社員は、4０万人減の４１２％、４０％。他方、契約社員や嘱託社員という不安定な労働条件の被雇用者が全体の１５％に増加。アルバイトやパートが全体の四分の一を超えたというこれからの労働市場は、「マネジメント社員」という一握りの正社員を常用雇用し、他には「プロフェッショナル社員」と呼ばれる契約雇用の高度な専門家（ただし専門性が役に立たなくなったら契約を解除）と「アソシエート社員」という名のパート勤務を核とする短時間労働者になるであろうと予言している。

この国では、国際人権A規約の「同一価値労働・同一賃金」という国際基準の労働慣行が徹底されていないから、上記のようなない制度が普及した暁には、一握りの正社員を除いて、雇用の不安定化は避けられない。

こういう過酷な未来に、この退行した少年少女が耐えられるとは思えない。彼らはバブル経済下に生を受け、おんぼろ日傘で育ったのだ。車中の高校生たちの呑気な喧騒を見ながら、暗澹たる気分になるのは私だけではあるまい。